

## 2. 地域開発と環境保全のための共通基盤

——ゴルフ場問題を素材とする総合討論の発展を目指して——

丸地信弘・那須 裕 (信州大学医学部・公衆衛生学教室)

### はじめに

先ごろ、信州大学環境問題研究教育懇談会の主催で、“ゴルフ場等の開発と地域・環境問題シンポジウム”が開催され、その演者および司会者のひとりに丸地は指名された。

丸地が受け持った演題は「地域開発と環境保全の一体化をめざして」というタイトルであり、この発表は類似の地域・環境問題の総合解決に共通する理論的基盤の提案を目的としており、そのため今回集会の冒頭にした。

発表では先ず、ゴルフ場などの開発を前提(素材)とした関連事項の広がりや「自然史」と「対応の五段階」的に捉え、この応用科学的認識が発表の前提になっているのが特徴である。換言すると、それぞれの立場からのゴルフ場開発をめぐる諸問題の発表をひとつの共通基盤に乗せ、問題解決に際しての基礎認識を共有することがこの発表の第一目的であった。

上の提案をうけて、今回のシンポジウムで発表された幾つかの現実諸問題を組織的に認識・対応・評価する枠組みをこの発表の中段に提示した。これは、関係の演者が互いの発表・討論を行なう時の共通の土俵になると期待した。

ついで、著者らの主題に関する全体的捉えを今回のテーマを念頭においてモデル的に表し、ゴルフ場開発など新たな人為的開発と地域住民生活とが将来的にも調和して認識・対応そして評価できる理論的基盤を提示した。従って、これは今回行なわれたシンポジウムの理論仮説の役割を担うと考えた。

しかし、実際の講演では資料の配布状況や参加者の多様性が気になり、それらを考慮に入れた説明になった。すなわち、どんな「話題」も学習ないし研修素材とする当たり前の覚めた目があれば、今回の著者らの発表の意味と位置付けは参加者に理解されやすいが、現実には全てのことを問題視から始める傾向の強い現代人気質が強く、その趣旨は必ずしも周知できなかった。

そこで、本稿ではそれらの印象も踏まえて、著者に与えられた役割をいまま少し多くの人に理解してもらえよう以下のように加筆補正する努力をしてみた。

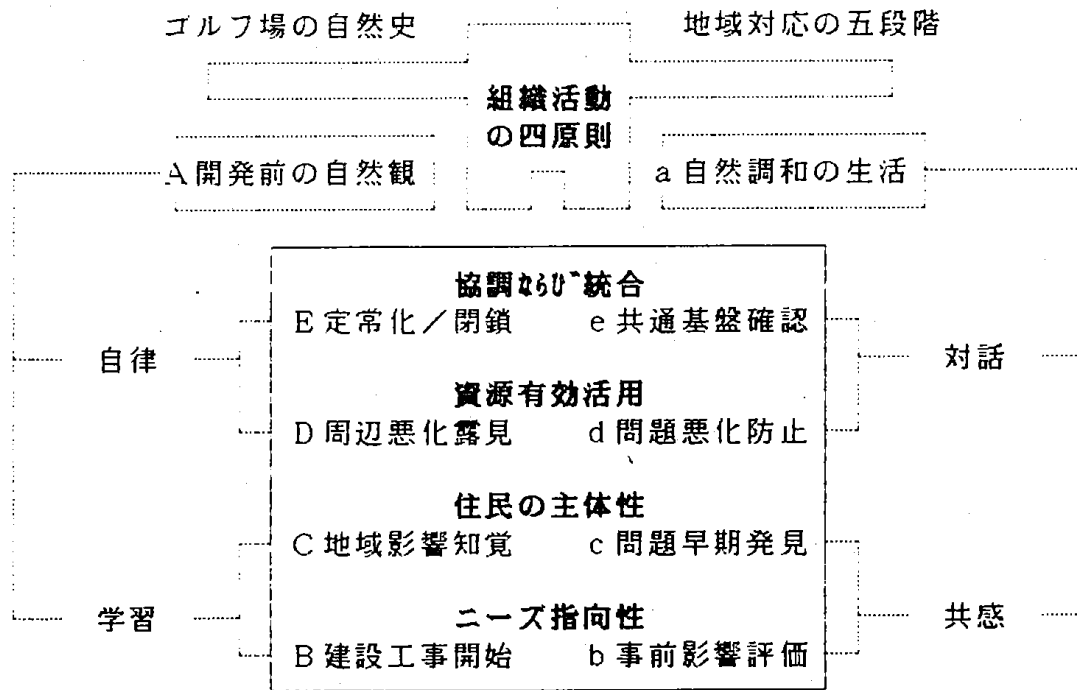
### 前提意識 —ゴルフ場の自然史と地域対応の五段階の提案—

何らかの現象に対して組織的に働きかける時、その現象を可能な限り人間的にトータルにとらえ、それを基にして如何に効率良く働きかけるかを議論することになる。従来の予防医学(疾病対応)の世界ではこれは Leavell & Clark<sup>1)</sup>により「疾病の自然史と対応の5段階」として表されており、一般にもよく知られたく健康増進からリハビリテーションまで>の合い言葉は、この五段階の方を指している。これは近代医学のすべての問題解決の前提となり、関係者の共通認識形成にも通じる考え方であり、その応用思考はすべての科学技術分野に及ぼすことができるであろう。

そこで、今回のゴルフ場問題に関し、上と同様な考え方を活かしてみた。図1の左右の五項目表示が「ゴルフ場の自然史と対応の五段階」に相当する。そして、本稿はこの右側の事項を理論化する作業を行なうものである。しかし、ここで併せて注目すべきことは、今回の主題は自然現象に対峙するものでなく、社会組織的な主体性を前提に成立する活動である。それを図1の真ん中の組織活動の四原則、そして、両脇の主体性の四原則(自律、学習、対話、共感)として組み込んでいる。これらは1978年以来、国際保健の分野で特にPHC(Primary Health Care)として提唱されているキーワードである<sup>2)</sup>。

広い意味での健康（地球の健康、地域社会の健康等）を考えるにあたっては、同様に適用出来る概念であり、すべて人間活動を組織的、主体的に完遂するためには必要な結合概念であり指針でもある。

図1. ゴルフ場の自然史と対応の5段階



### 検討の方法

本来、図1のような図式（General Network Model 略してGNモデルと呼ぶ）はこんな平面的なものではない。紙面上こう表しているが、この図式は立体モデルの一側面を示しており、本来の立体モデルは125個のキーワードで構成されている<sup>3)</sup>。それだけの用語を表現できないし、またそんな必要も実際はない。

この図式は、著者らが十年かけ開発した総合ネットワーク的接近という「思い」を科学する理論と方法論に基づいた考え方である<sup>4)</sup>。保健医療など今日的な問題を総合的に解決するため、関係者が従来の知識と技術を活かしつつ、自己開発指向的に「発想の転換」をする研修ならびに研究に用いるための一体的な理論であり、方法論でもある。

この考えは、人々の問題解決の思考過程は性・人種・宗教・問題種類を越えた共通性があると仮定し、それを表現する総合感覚（モデル・原則など）に注目して概念化したものである。このような人々にとって当たり前な考え方は、皆に身近な素材を用いて共通基盤を確認する相互学習（相補的バランス重視）を通して意識しやすいので、ここに応用したGN的接近も保健活動事例を素材とした話し合いを通して試行錯誤の末に開発した。

図1のような総合感覚的なGNモデルを検討に採用しているが、このパターン認識的活用は全体観と倫理性を共通感覚で無理なく一体化でき（Two-in-One）、従来の科学的発想（Two-by-One）もその一部に位置付けるので排他性が無いのである。

この「総合ネットワーク」の考えは、その根底において人材開発（主体性）と理論開発（組織性）、対話的接近（自律性）と对象的接近（客観性）の四者を重層的に一体化する願望があるので、これを「総合ネットワーク（GN）の四原則」と呼んでいる。

従って、上の考えはあらゆる分野の総合問題解決に適用できるし、事実、著者がこれまで関係した仕事には何時も適用している。但し、ここでは一つ条件がある。それは関係者が共通の問題解決を協力して作業する姿勢と態度が必要だということである。

なお、著者らはこの仕事に興味を持ち始めてから、科学哲学者ケストラーの格言「全体のなかに部分があり、部分のなかに全体の本質がある」という言葉に惹かれている<sup>5)</sup>。

ここで資料としたシンポジウムの内容を簡単に紹介しよう。

「ゴルフ場等の開発と地域・環境問題のシンポジウム」  
 信州大学環境問題研究教育懇談会主催  
 日時：1989年2月26日（日）9:00.a.m.-5:00.p.m.  
 会場：信州大学 旭会館3階大会議室

プログラム

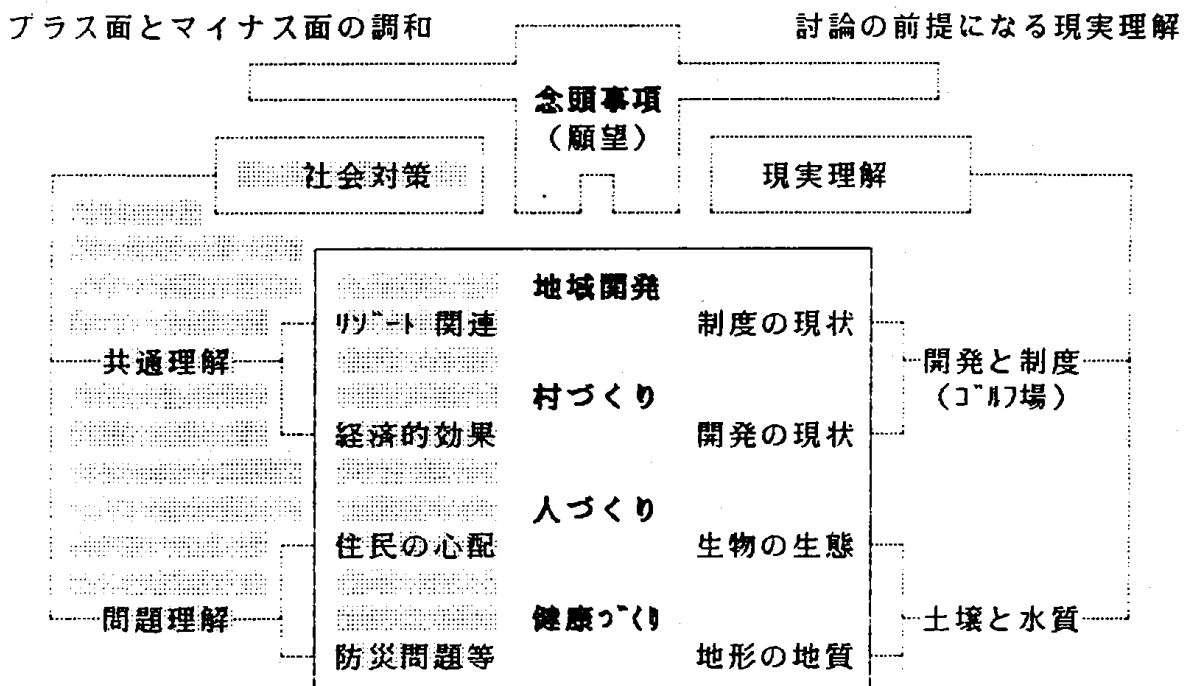
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 長野県下におけるゴルフ場開発の現状と開発規制の制度</li> <li>2. 地域開発と環境保全の一体化をめざして</li> <li>3. リゾート開発の一環としてのゴルフ場開発</li> <li>4. 信州における観光・リゾート開発について</li> <li>5. ゴルフ場開発の経済効果</li> <li>6. ゴルフ場開発と自治体・住民</li> <li>7. ゴルフ場開発と地形・地質（コメント：山地開発と地下水）</li> <li>8. ゴルフ場開発と防災問題</li> <li>9. ゴルフ場開発と水汚染（コメント：ゴルフ場の害虫と農薬）</li> <li>10. ゴルフ場開発と植物・植生</li> <li>11. ゴルフ場開発と野生動物</li> </ol>	<div style="border-left: 1px dashed black; border-right: 1px dashed black; padding: 0 5px;">午前</div>          <div style="border-left: 1px dashed black; border-right: 1px dashed black; padding: 0 5px;">午後</div>
--	--

### 成績とその考察

#### 1. シンポの主な演題構成 一問題悪化防止のために一

人の「思い」にはある纏まりがある。例えば、今回のシンポジウムのテーマを討論するため多くの演題が用意されたが、その概要を図2のように関係づけ、一括して捉えることが可能である。この場合、基本的に認識しておきたい概念が図の真ん中に示してある。すなわち「地域開発、村づくり、人づくり、健康づくり」である。

図2. シンポジウムの演題構成



何れにせよ、著者らの仕事は皆の思いを引き出し、関係づけ、見通しを立てる水先案内人になることだと認識しており、従って図2はこのシンボの「作業仮説」と考えてると解りやすいだろう。

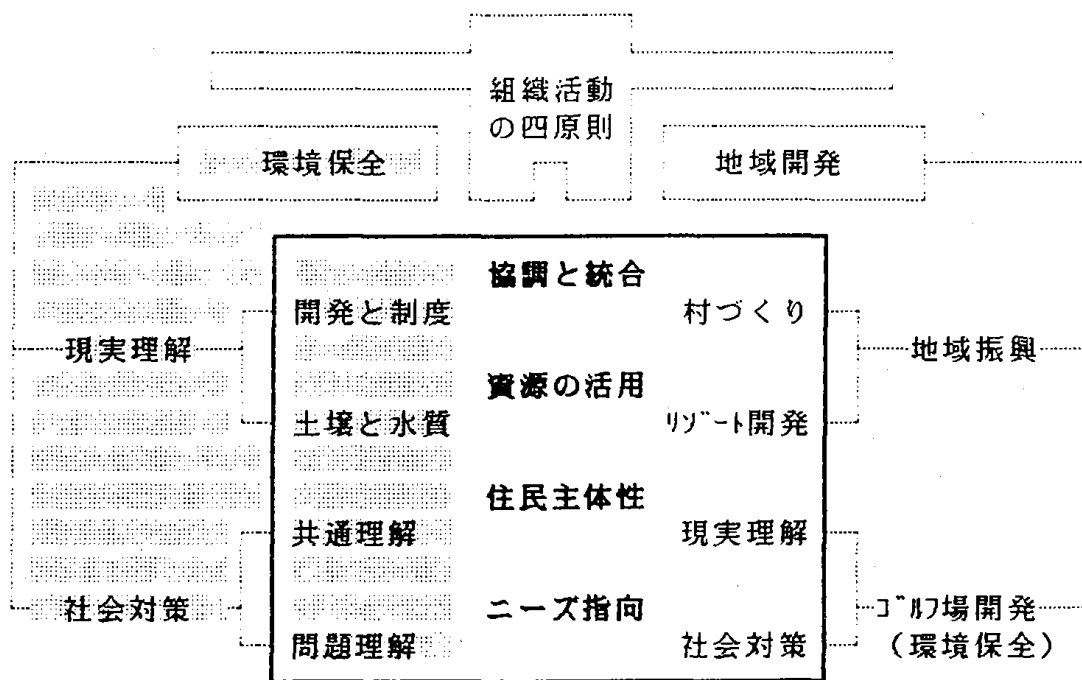
### 2. 地域開発と環境保全 ー問題早期発見のためにー

上の関連演題を念頭に置いた上で、丸地に与えられた演題「地域開発と環境保全の一体化をめざして」を今回のシンボの中で位置付けると、図3に表すことができる。これを基に関係者による情報収集・討論を進めることにより、問題点の早期発見が効率良く行えるであろう。

ここで、左側の斜線部分は図2のキーワードで構成されており、それを「環境保全」という言葉で代表させる。そして、「地域開発」を表す四項目をこの図式の右寄りに配置しているが、下の二項目は左側を表す言葉の下位概念として置いている。

上の二つ、すなわち「環境保全」と「地域開発」を関係づけるためには、人々が問題対応の組織活動を展開する必要があり、それには「組織活動の四原則」を念頭におくことが重要である。

図3 地域開発と環境保全の一体化



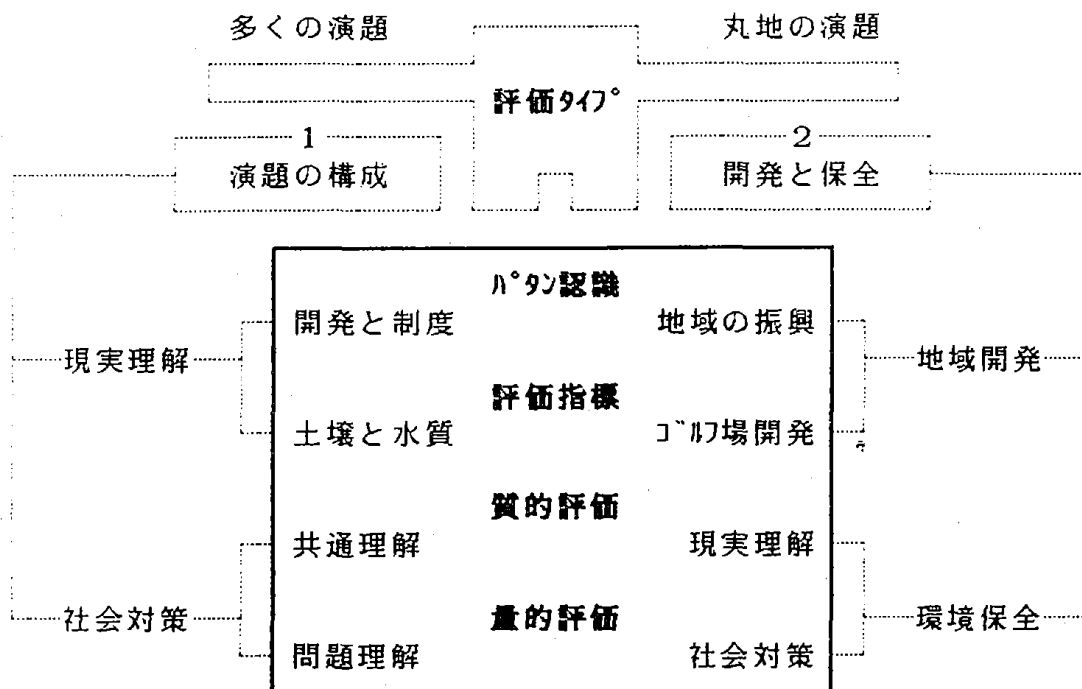
### 3. 主題の全体像/評価基準 ー事前影響評価のためにー

今回のシンボは図2と図3を一体化した内容だと考えて良いので、それを図式化すると図4のように表わせる。すなわち、この図式の左側は「シンボの主な演題構成」、右側は上の「地域開発と環境保全」のキーワードを配置したものである。

一方、この図式の真ん中は評価基準として「パタン認識、評価指標、質的評価、量的評価」で構成されている。組織的・主体的に意志決定を行なうに際し、これらのいずれについても検討することが必須条件である。

換言すると、この図式は観念的だが今回の主題の全体イメージを表すと見てよかろう。理論的にこのようなことを事前に意識できていれば、実践的問題の関係づけもしやすく、問題解決自体が容易になりやすいのである。

図4 意志決定の為の評価基準



この図式の真ん中の「評価タイプ」については、われわれのこの分野における試行錯誤の末にこのように定式化したものである。ここで、普通ではなかなか意識できないのがパターン認識であろう。これは原則的には総合ネットワーク・モデルを意味するが、人間の問題解決には基本的には同じパターン認識があるという前提から生まれたものであり、経験的にこの考えを基本におくことの妥当性を多く経験している。

思うに、われわれはこのような共通感覚を生かして問題解決のための共通基盤にしているはずであるが、従来の分析科学的発想のなかでは客観性に欠けるということで、いつの間にか忘れ去られていたのであろう。

### 討 論 と 結 論

以上の成績を踏まえ、今回のシンボの討論展開の方法、シンボで目指す共通基盤の提案等を以下で述べよう。また、主題に関する専門家の目と庶民の目の関係にも触れたい。

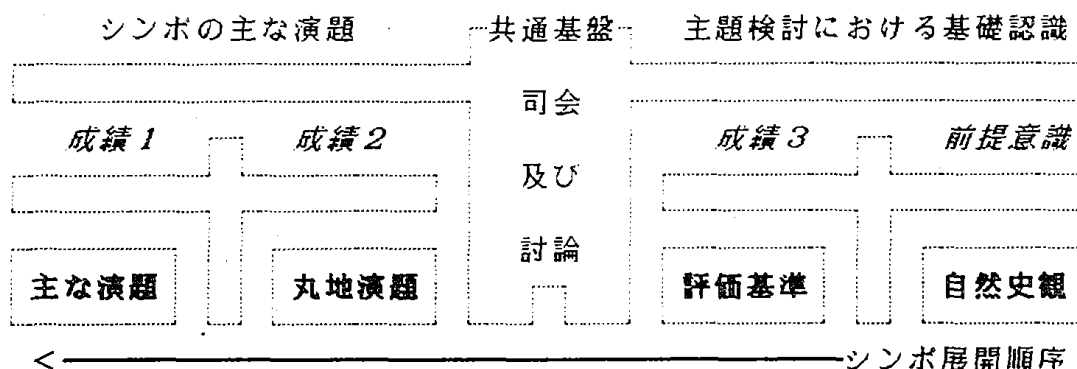
何れにしても、本稿で論じたような理論ならびに方法論を関係者で共有できれば、問題種類あるいは専門性に関係なく基本的に類似の仕方によって仲間と問題解決することが可能になるのである。ただし、ここで大切なことは関係者が共通目的を話し合いで解決の方向に持っていくという人間社会の原則を大切にすることである。

#### A. シンボの展開と四つのモデルの関係

これまでに、本稿では同じタイプの四つのモデルを、互いに関係しているが主題の異なる場面に活用して、今回のシンボに係わる当面の諸側面を構造/分析的に述べてきた。

そこで、これらの内容を今回のシンボの実際展開の順序に合わせ機能的に関係づけして示すと、それを図5で表すことが出来る。本稿の冒頭に挙げた自然史的な捉えを除けば、本稿の成績で述べた順序と全く逆転したほうが多くの人に理解しやすい話の展開となり、論理的にも筋が通る。実は、これが「発想の転換」の実際であり、検討の過程でこれを行なうことにより、<樹をみて森をみず>の落とし穴を避けることが出来るであろう。総合的な検討・問題解決を目指す場合には、このような発想の転換を行なうことが常に必要である。

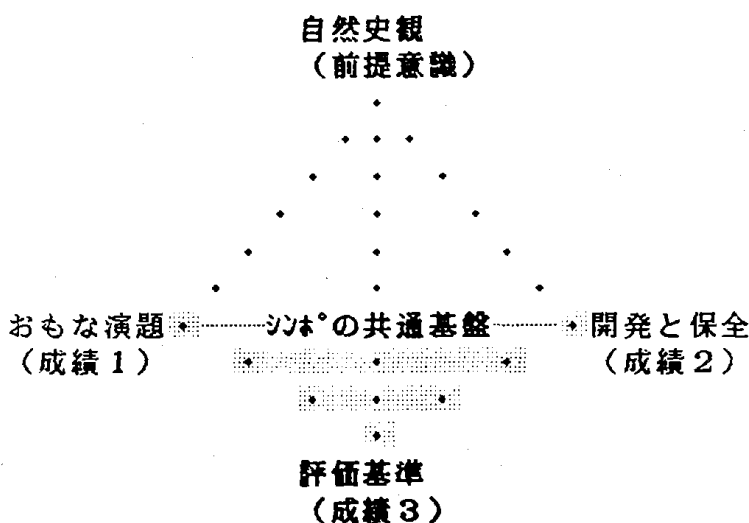
図5 シンポジウムの進行順序と本稿の論述順序



B. 四つのモデルの意識空間的關係

上で述べた四つのモデルをどう関係させ意識したら理解しやすいだろうか。われわれの従来の経験では、これは正四面体モデルのそれぞれの頂点に図6のように配置することだと考えている。これは、同時に十字モデルの先端に四つのモデルを位置づけると捉えてもよい。

図6 正四面体モデルで示した四つの概念の位置



ここで、今回のシンボの場合も多くの人には「横軸左側の成績1の実際的内容」に眼が移り易いが、それらの検討も「横軸右側の成績2の理論的内容」を基盤とすべきである。しかし、更にそこで忘れてならないのは、上述の実際と理論のバランスを支える縦軸の存在である。主題の全体像を念頭においた覚めた目でシンポジウム全体を捉え、かつ本稿冒頭に挙げた「ゴルフ場の自然史と対応の五段階」という生態学的認識を共通基盤に据えることである。これらをバランスさせることによって、今回のシンボではどの段階の問題を、どうしたいか、など明確な問題意識段階を関係者が共有することが出来るだろう。

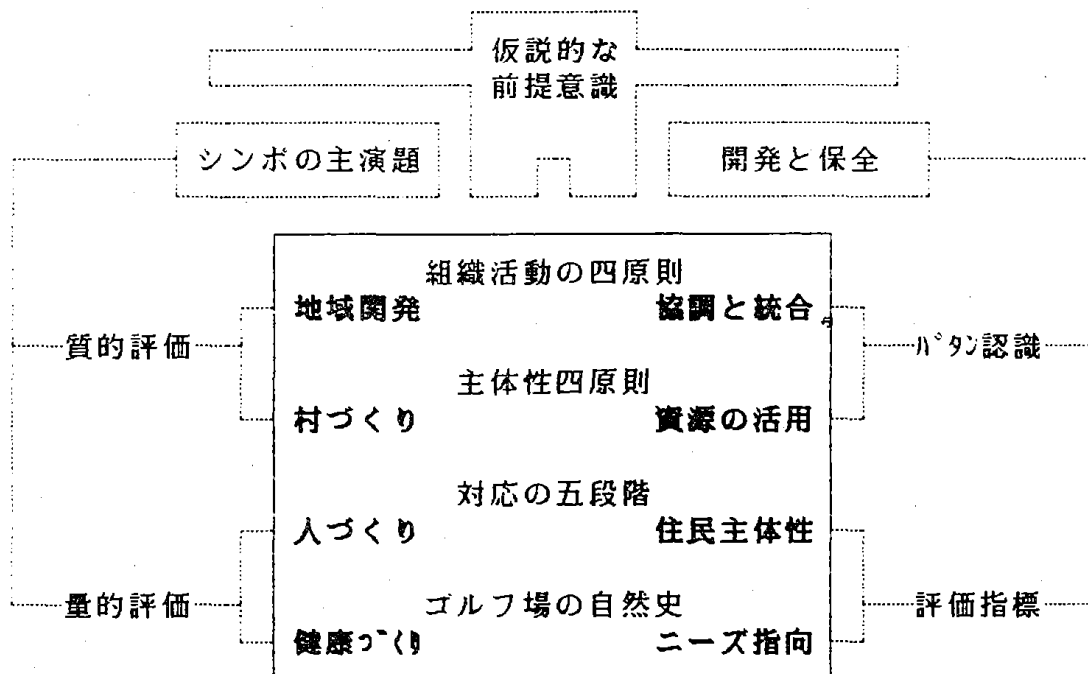
C. シンボで確認したい共通基盤

図6の活用で、その真ん中に位置づけられるべき存在があると著者らは考えはじめた。それは、正四面体モデルでは中核部に位置し、十字モデルなら縦横軸の接合部をなす機能である。

一体、それはどのように構造化して表せ、どんな実際的な意味をもっているのか。著者

らの総合ネットワーク的接近の経験を活かせば、ここで意識しはじめた課題は今回のシンポ主題を素材にした結論であり、多くの社会的課題の問題解決の「共通基盤の確認」を意味するはずである。

図7 今回のシンポの共通基盤



上のことを念頭におき、図6の真ん中、すなわち「シンポの共通基盤」を本稿で度々用いてきた総合ネットワーク・モデルで表すと図7のように示すことができる。これは今回のシンポに関心を寄せる人々の共通基盤だと言えは良いだろう。従って、これは今回の討論でみんなが最も大切にすべき事項を時空一体的にまとめたものである。なお、この図7は本稿の討論と結論の最初に示した図式（Aのシンポの展開と四つのモデルの関係）では真ん中に位置すべきものである。

#### D. 専門性と庶民性の意識世界の存在

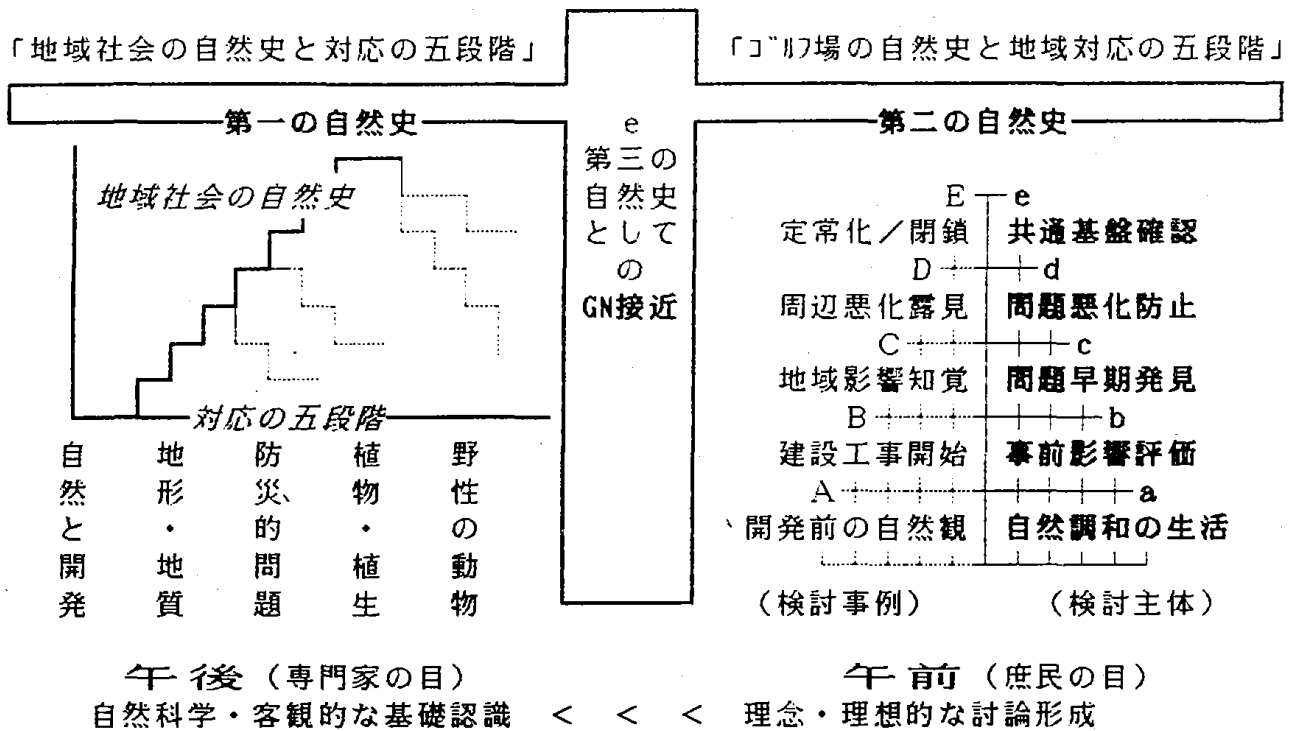
ところで、丸地は今回の発表に際し参加者の状況判断をして、図8のような捉えを最初に述べた。これは当初の抄録集の原稿には入っていなかったが、多くの参加者の関心がこの図式の左側の項目に傾斜すると推察したので、それらと丸地の発表との関係を事前に明らかにしたかったからである。

実際、今回のシンポに参加してその予想は的中した。午前の部の多くの発表はこの図式の右側に近いような理論的内容であったが、午後の部の実際的内容の発表や討論でそれらが必ずしも午前の部の内容と関係づけたことは少ないように思えた。

ここで、図8の左側を「第一の自然史」、右側を「第二の自然史」、そして真ん中を「第三の自然史」と仮に呼ぶことにするが、これは従来の発想を基盤にして問題を意識する自然の順序だ、と受け止めるとよいだろう。逆に言うと、総合ネットワーク的接近という考えが基盤にあれば、その理論的接近として丸地らが発表したような内容を自然に意識でき、その下で実際問題接近の各項目の関係づけが意識できるのである。

なお、図8の内容は総合ネットワーク・モデルで一纏にして表すことが可能である。ここでは紙面の関係でそれは省略するが、そのことから言えることは、今回のシンポの大枠はこれから始まり、そして本稿の後から前の方に遡って説明したほうが適切な理解を多くの人に期待できるように思えてきた。

図8 ゴルフ場問題に関する三つの自然史の関係



**E. 相互／生涯研修としてのシンポジウムの意義**

ゴルフ場等の開発が環境保全とどう関わるかを理論的に明確にし、あるいは両者を無理なく一体化し効率良く進める方策検討のため、今回のシンポジウムが持たれた。そこへの参加者が有効な討議・検討ができるようにわれわれは共通基盤作りを考えてきたが、このような共通基盤を持てること、そしてそれを維持しつつ、話し合い、方策検討を進めることこそが、このシンポジウムの最終目標であろう。

互いの共通基盤を作り上げるための相互努力を「相互研修」と呼び、それを維持発展させることを「生涯研修」と呼ぶことが出来る。近年はあらゆる所で”研修”という言葉が用いられているが、どちらかといえば徒弟的に知識・技術を教わることを指している場合が多い。様々な専門分野の研究成果を正当に評価し位置付け関係付けた上で、それらを問題解決にどう役立てるか話し合うのが、ここで我々の目指している研修というものだろう。人間の暮らしと命を守り発展させることが至上命令である地域医療の分野においては、より差し迫った課題のために、”研修”の在り方についての議論・実践も活発に行なわれてきた<sup>6)7)</sup>。大局的にみれば、環境保全と地域開発のバランスの問題も、将来的な人間の暮らしと命に密接に関わっていると言えるので、そこでの問題解決には、もっと関係者の研修的姿勢が要求されているのではないか。我々の示したGN的接近による問題解決の筋道が、それを推し進める一助となることが出来れば望外の幸せである。

何れにせよ、著者らは主題発表を通して今回のシンポジウムに関心を持つ関係者に必要な共通基盤を提案できたように思うし、同時に、この論理過程に従えば他の類似の問題解決の普遍化にも活用できるという目安を得たように思う。その意味でも、今回の主題に未経験な著者にとって、このシンポジウム参加はよい学習の機会になった。

なお、今回のシンポジウム開催前に著者等は同じ主題で今年度の環境問題研究教育懇談会報告書に原著を掲載しているが<sup>8)</sup>、本稿はシンポジウムの経験も踏まえてそれを説明的に書き替えたものである。



## 文献

1. Leavell, H.R. & Clark, E.G.: Natural history of a disease process. Preventive Medicine for the Doctor in His Community. New York. McGraw-Hill. 1965. に所載
2. Declaration on "Primary Health Care". International Conference on Primary Health Care. Alma-Ata. USSR, 6-12 September 1978.
3. 丸地信弘: 保健医療の総合的接近のための"第3の自然史の提案——<学習体>の多重構造的自律性の理解. 保健婦雑誌, 1985年6月, 41-6, 68-81.
4. 丸地信弘: 「思い」を科学する、からだの科学、1988年7月、No.141, 12-16.
5. A. ケストラー: ホロン革命、田中三彦・吉岡桂子訳、工作舎、東京、1983、
6. 丸地信弘: 地域医療に指向した総合問題解決の理論開発とその実践応用 —総合ネットワーク的接近による医学の教育と研究の一体化を求めて— 信州医誌 37 (1) 9-15、1989.
7. 丸地信弘他編著: 事例と対話するトータルケア、医学書院、東京、1986年
8. 丸地信弘、那須裕: 地域開発と環境保全に関する現論開発研究 信州大学環境科学論集 第11号、(印刷中) 1989